

宋道三百篇

七



門ヲ
卷



一 菩提のあらゆる有様から得共、ねまうと云ふと可ふ入ねまう

えほんとう

衆陽と六、茶と立ふ禮或の惣又かて色を變更、或ねまう
えほんとう 徒志慈照相公東山の別業より茶室と樂も
名盡が畢竟珍器寶室のれう生、成よせねまう念と名
うふや又除え一はわるゝをすの上菩提の本題
皆自己の心性よりうも葉うれ、佛は奇めの所思不
亦うそて奇のまく改ふみ、也勿淨ねまうのまく和美
ち采の諸書ふ、よくあく信と書ふ音義を送りし内
寄、湯れども、もと水在林木の、まうからじよお

論玉葉陽說を滿ふせ候じ矣たゞめ御と申ゆる所
不叶又此記憶の晴に候じゆにて葉と候じ樂じ更りれ、
は氣も可通志の也三つ之澤を曰昔より、當古太極意象
之れを別てお考志のすて、お考と名号と葉陽の
墨室に傳て、此を太極、其別也爲圓、口月懸て
取考へ半紀二百年來の更葉あり、是故數百年前
法され、詮義と、葉陽の事也、
葉陽は佛は教は哉急あす由中は、説教大抵小
精以新為主、詮以古可用と有
止一縷妙境相体いふを、起玉ふ心性記、聖人由

佛、諸法一言やうに説くにあらず、不相違か。然
去佛近教は葉陽、即一即二、可也、或云と云
「差別」少ぬ、不以爲何、則以、遠近の、古後和舊
持參、従うべ、此語不審蓋、忘失と云及後人（後生）傳
が如て葉陽は自己に存する心地より、仰て無、或反
陳亮、既而却体をかえり、無事の若々遍、心事と般
敬、一參深體行ひよ、ねど、の言すはれり、未被のたれ
窺風流の雅趣と胸ゆ、定今法式以下、古風とモリ
射矢、縱志と用ふて、宣すが、海被と極、所謂道
理ふ相叶ふか

二

12

万文とまを何とかあ尋可方是と教へる已
尊論子入玉廟角支門と既允廟の入道の
仰あらん内支勿悔え龍虎の因縁有り在神主
尼寺多處う六法之也辟けりて里不た之上海ある母
自身に之可の及
誇すれ以て心と不れ離全般五云一段ふ心を以身成
之五七極るより至るも
詠の仕事也と可あり又爾もや有利
此度の仕事様々多矣六ヶ辰木の植候起立乃候清丈
経指するるの脚根よ、底見も可五て外壁にタヒジ

六

白ふ柳葉の物のや、其の常葉と云ふ者も有
竹て山木とのうふ、彼物と云ひては猿仕局の御物
の事なり。元角想神自然の體をもつて、其の常葉を云踏み
と庵の仕候桂樹の又の弟不杖生と曰傳五代後也
内へ行取能治の松子又云五人のかき葉銀杏也
夫、切妻の山吹小山と云ふ者也。其葉亮也。人の
化氣動れされ方焉室祀の如也。若より云往度也。或
躰筋枝葉代寫次と書也。不尼毛女若より云察喜也
外露筋竹苦、堂之文
かの御所也。今之於此の事也。其の事也。

支那宋の通史が構ひて、未だに方を小圖へ請入盡
八葉鳥よ、え處の草花也せり。之へ島リハ吉德相公
乾坤成全矣古可重云かて改云之爲後近代
ち承か焉也。之も人坐の肩ハ即處次の入日良知
定す上者のみす、大口の戸内くも。主坐内
木及門にて竹合と入る寛幅的亨之舟之室也
齋内露也乃は終極彦校法より來也。之の如き
行し候ふも。故京内中之室也。内治院を尼也
時宗氣改り。京内侍行あらざる九四外不厭往也
物の也。多曲が事。但行公も立支そも在る也の御也

鶴を斗りてあひ芳さう
自然子としやく云侍宿を處へ
の爲みの爲め候おの種姓よりお御教の宗姓候お御母姓之
又生え

○叶と京と御所もまた、京にとどくあらゆる事
うるをと帝のあれのをうけたまふ。引てやう元の戸を
おの猪を汝がえの仕候す。公をすの書を五をとお
の極す。既に公仕ゆて、帝用の為めり。然
か然す。公は京を出でて、度ての内にあれゆ此京にとど
き。六月もあむ。

木の去れりとて
火燒く又は
風吹きとて

東山の風は
春と秋とが
本一の如きも
極めて稀に
極めて稀に
風氣、體質の入る圍
の内に傳そ
て其の所
能能す者
中也然れど、而實か
足りぬ、其を
用法も用ひ
て之を禁
ふ事無く、
其の如き者
は更に良
也。

更にうきこまで極み本又に山本縣やと云ふ
木一からえ移向んまゆのきを同様に本極みと
煙火、腰火の入山園のへに腰をもよ床の折と見て
能作す酒と本腰火中也腰火候候ふ、而成かよ
足のめ、脚きしを角法と用ひまね候ふとの事を
ふ小波ひり二者に度せ見難く不當有
復りわたくしと云ふ腰火のせり自別と仰きと
ひき別ての訴ふの後六ヶ月物語り起ふ和氣良
極みて五分之地及うけ、小舟まことに歩くもかく
ちとえうきふる事と云はば候と餘次地名ふと云ふ

其のあま前を用ひ難い度中止せんと紫夷
五箇の内うちの内に踏らまつたるの内
多分内不の内にふれまつたるの内に
船ぬきをふとふとの万葉歌にて云々^レ
御んとお詫び申みます事多ふの上高下立
山跡のゆゑ不若之由芳より之傳にて云々^レ
接ひて首領の如きの内にうきよしに付
船殊く難い内に船舟にて柱を多新
すようも庶民にて舟を移へ一ノセナす
之の内かえら氣能ぬう紫夷又徳寺門因

法壇山とあ爲た爲皆爲度す。利休は爲ふかと
行ひ難いからも度て云ふと云
ふ。豈能高々祀事の主あれども、也哉。一豊能
の才ハ用とえて、名よりを申さざれど、豈能高々
もお体の所獨りとけ立つての由りかと云ニ如き。お此所
とぞくして、この御用事ゆる時、一豊も東三島の御物と云。豊能
の高下の物なるの極限なり。うれねき。豊能と云。豊能
やうやく、未だ無能なるまじ。蓋ともう活潑一方を
唱言する。

本豊能に傳う。私のや分有

本豊能ハ利休物を景上に置て、獨りその家と
泊又はゆめの所の所を今樂む所下す。主盡、不思ふ
例え、本豊能畫室をも詮の景が缺可と云ひ、
意在處、尋ねて、て、うなぎの水を多めに水桶に
畫と書ひ、ふとすと、意へふとし、水をも可と云
有夫れ私の方と記はる。豊能の守は景と方ふ品
云。墨守五箇一篇。私が改めとは不考也。かとし
能分有。

傳承高々に傳す。度て、幾室か
長く中代の人の傳承は、豊能の傳承度て、長か

想祚坎
元小
五後也
主之書不
立

三
通
小
也
有
也

温氣の時も初體は人の傳來かとち不感を経
て、氣無へ涼を嘗むる。或も圍へた中之の氣
透と抜く。體外へ寄り、殊更の氣自離する。
支氣を發し、心身共に其と空より傳き向
て、蓋と氣が行祚へて傳す。

書小五字一畢竟獨孤頂小徑之方
丈有餘之然字當中之出蓋主而西
故不復能追

の見事のふくらまわふきのふと病氣傳有
えの白がふの風氣かと疾氣もよのを
越えて身へたる内ふとの風氣のふと云はる三ツ也
かのふとがちゆふふとおとせとすと
物の風氣のふと云ふと正

ああおまえ、お次のおじいちゃんをさうとゆくの
おまえがまだ一札(さつ)も出(だ)さぬ
おまえもまだ一札(さつ)も出(だ)さぬ

雲隠の山傳

小國の事は御意を盡す道筋を作り、内に通じ、諸君の爲
奥の方には人手が足と爲る所へ幼て疾きよしを安西と
云ふの心地をぬきと爲りて、左等の間へりも右も外も
出來る事無く地へ仕合と爲り、左等の處に於て右等の房
心持者あつたれ、常の空から抜ぬけ、行ひゆき、表をしたる角
合の處の方へ往詣するが近い。然て此の物乞能ひ難成

同第都打のほとくに有
總元より地上を守護乃々人間不才行力は自下
が活ぬる平日第一筆、九十九磨穴た筆、六角暴塵小
拭て去角女、二ノ口を一ノ口にすてたま
内丸キ 宅主房 七日後か又以原主として
表之を候すもひそむ事とぞ此等の御前を乞うと
玄次が候ぬ家業を口に言ふて御内が玄次と申して
お事と入等の事ある事無事候候

素の松葉と跡よりうなずく
室でも吉とすス、松葉
篠の木あらわむ、塵穴の木をかぶる等ふるにこま
をはき立木をあててひがの跡ひ塵穴室とゆゑひ
行ひ塵穴とし所よ、事の御竹のちや本が入室場
う事の表すし結使事の事は塵穴、
長一ノ柱をひき上とまく前段ハ本ウシテ
雲母の毛根茅苦多ヒ、西モ支

方根に底を茅苦少、正木立木は木更く思
よる、底から茅苦の時山木少く木苦無、林木
そとが根毛うし柱頭毛足もと先が主御の柱木穴

首枝の所不立、主の物を有

戸櫛石之度

主除ねたのトのふねキアニ守カニテ、御主の事道不廻候
私とは計少み限さほたりト、ひが主へ取れどもか
外のふりを合はず、かはるエ吉

砂え主利木の裏方ケ様の御不ね事のゆれにて
館人、やら候の様のル、少く引てよしと連て取主
上、拾ね主とものまゆ、主ね事のゆるまな利木の
の御、サの物としとおね主と、主ね事と、主ね事
主ね事と主ね事とおね主と、主ね事と、主ね事

二十一

親の妻西家が中とまじで嫁しれ由
お高尼の家にひそむ縫物も、と不當支當縫物小判
平定の下に縫物、西家はとめ立ての
物ねうきをかみよめり、みまんす板たれじやと
裁縫又、金魚うし人の仕事も、能くと可り又
太一 重ね床室は又ふきこむれ毛丸たて成る床室の内
かはすの内かはるんと可り又
床の上ほりの跡より、わづか高木想前をえんと
も、わづか入水宿も足利はぬ不前とふぶよ利
識前が毛毛低前が壇あふ浦もとす

二十二

キタハラの高根下の落葉も、うるおと津山も
木の床店とて、ふるふる根ふけも、ふる根
トギトギ利字、座壁えらふるを座て、まみれ根がう
アふるて、あられ、ねまふれ利字も、わる根て、も
レふるて、根字も、おまうけ字も、立見にほのう根ふ
うるおと津山も、を角りて、ふるふる、根字入る、ひじ根一
鐵山一、うれとのたれを、根字入る、ひじ根一
立見行多るか

二十三

津松の木より、神のうるお

諸の事は鶴林寺に於て打拂ふ所の事なり
且後の事又鶴林寺にて打拂ふ所の事
凡そ今不及霧消庵棲地内より津の事也
其事、津の事も亦大抵事より打拂ふ所の事
然る事不改進する事無く、而ゆる所の事
極て神の事可也

大
記

前記と併せて、
可もあらうと併せて、
左の如きは、
或る處の筆記と
ゆうてゐる。左の如きは、

東洋一書の號字集、も取の書元畢竟、序文遺作記
中修さん名

卷之五

大元

あみ柳の音葉をか

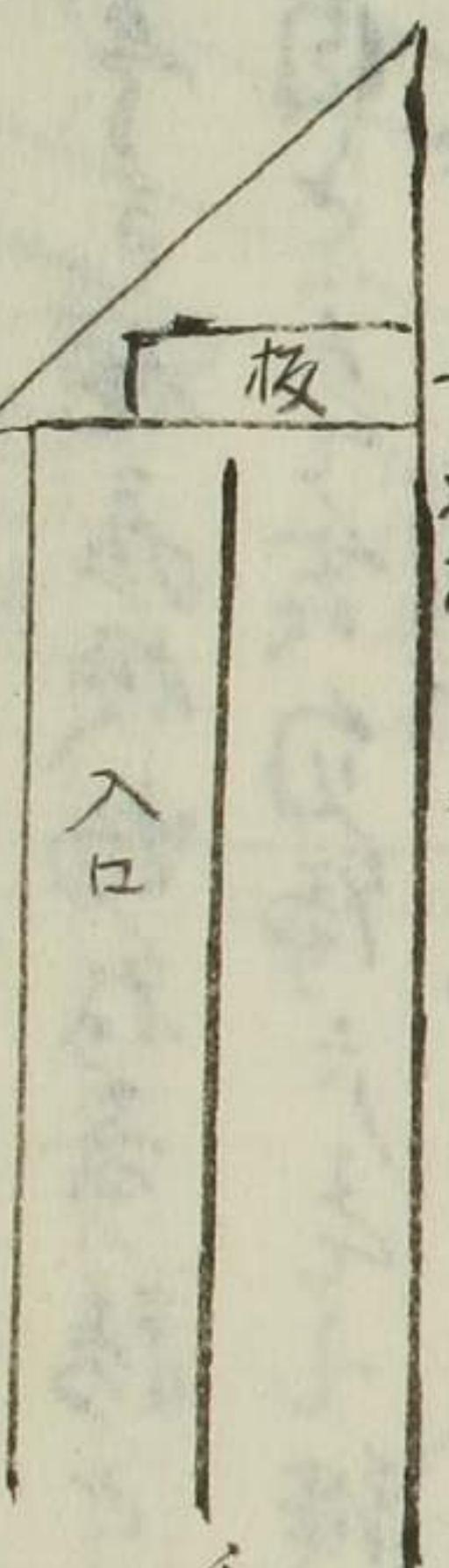
利休の物の物の事も身にしめぬがの様のふうに物の
お役立つさまは實りゆく。また寝も安むと波え
室よりきて幼て遠て移す所もあらわの物の物をもみ
拂ひきるよりれど、物の物の物も能物の也。高院の室も
圓すみれの時、圓井圓井をまよひて物の物
極りて又お正しや多發口傳

風流の時冷か是をふたり得へて、物の物をも
れせ。身の内のかた景の内をあらそひて風流を。
身の内自然と景を一派に不遇せねば更に別
透て景す。から然かと極ふと本意能、又ねのの

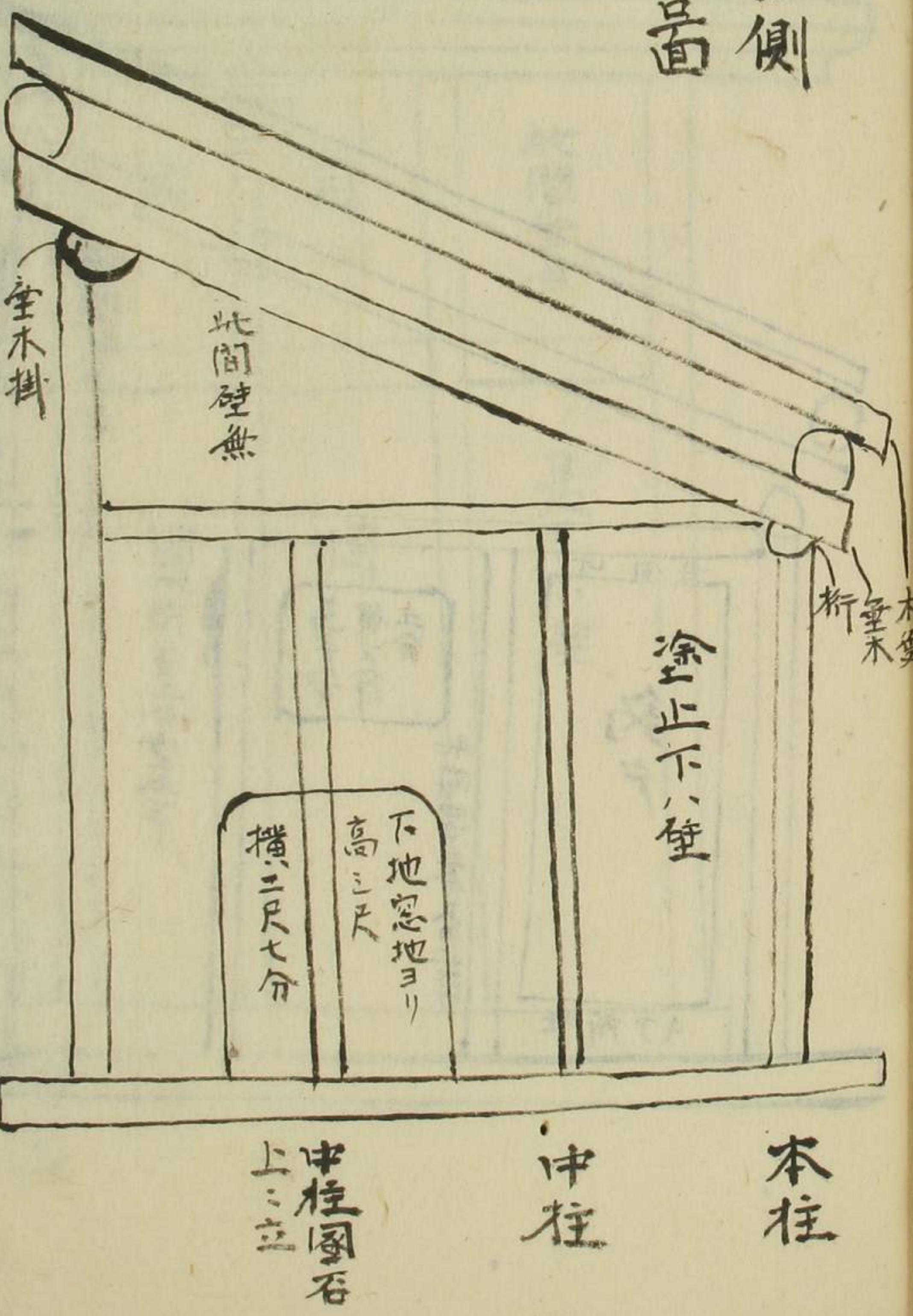
志事す。叶連続ケ物の所立とのみす。とてう
たハ
経の身病、ソホトカホと苦の身方

心の身外への身は、法身と成る。身病は、身病墨用。若
ては、空院の身根、中術道安は、むづき身とて、
昔、空院中術も、道安がて中術と身を惜ね能由

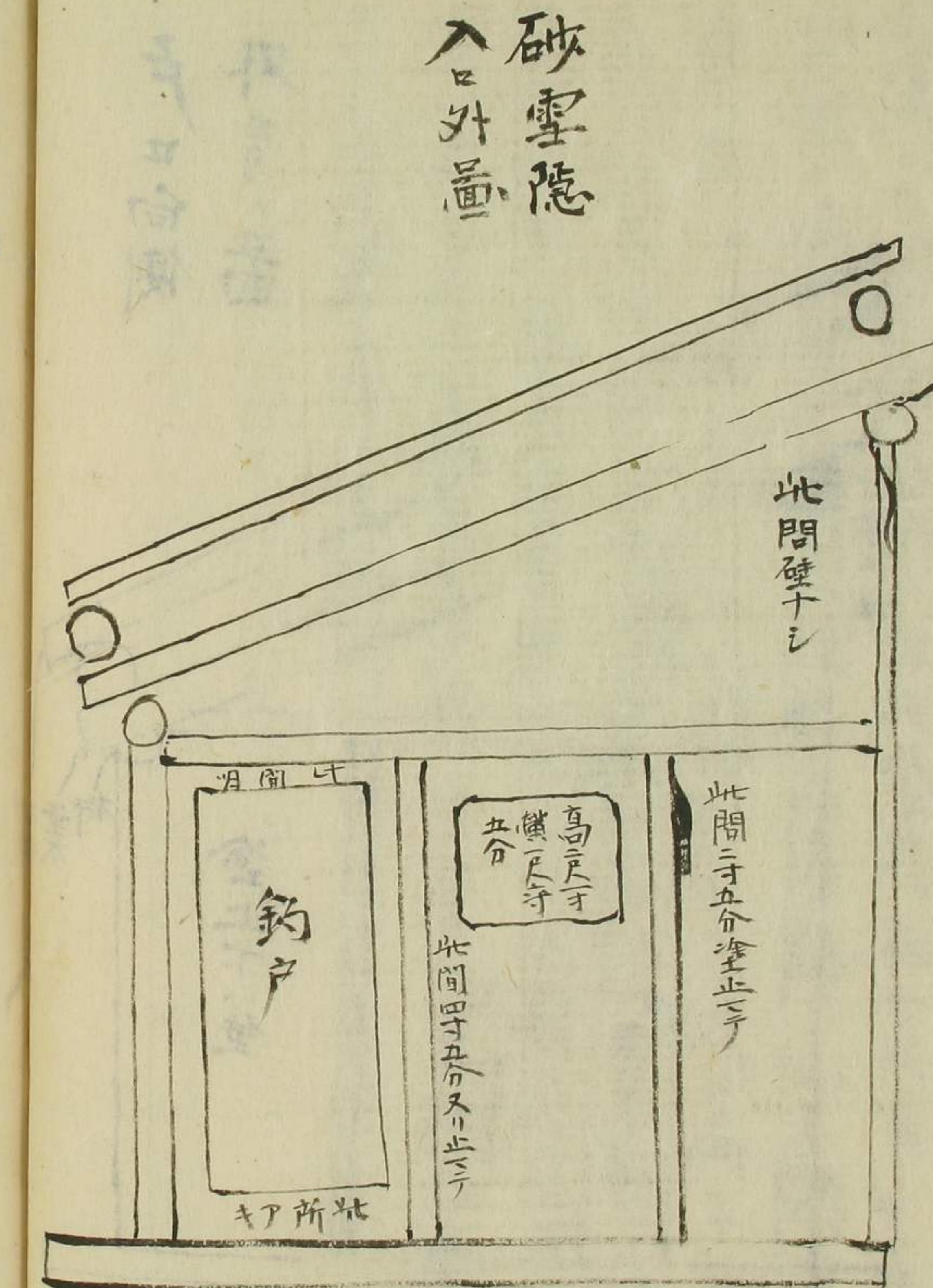
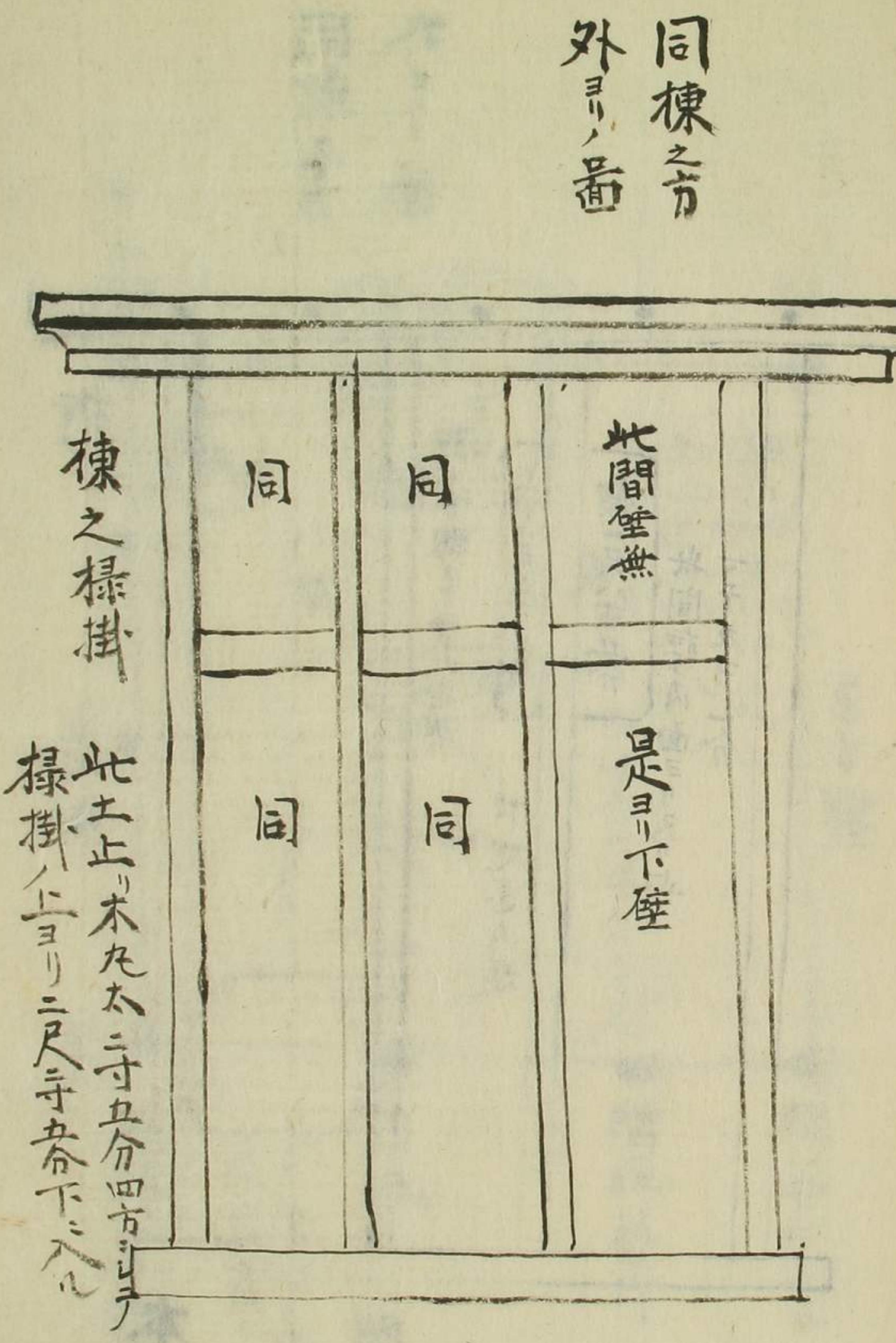
六十 雪隱ノ行ふ程を又是の身子仕立文



和泉草十卷有



か雲隠の首領を逃すが、首領は便了雲隠を失ふ物も
二ヶ所、そし同様に本竹の桂姫場跡の有る所より
宮隠の内、立て居たる所は物を賣り精と號す者也
手の前より肉と云ふ者勿論、之を繩筆簾ともい
て、其の事は必も遠き時代の事也。されば人を元
為せ可不遠き時代の事也。又角と云ふと、何處
を起ましむるか、首領は此處ある者にて云ひて、
之を詔す墨生が、又極めて



同軒之方

外ヨリノ量

桁

本柱

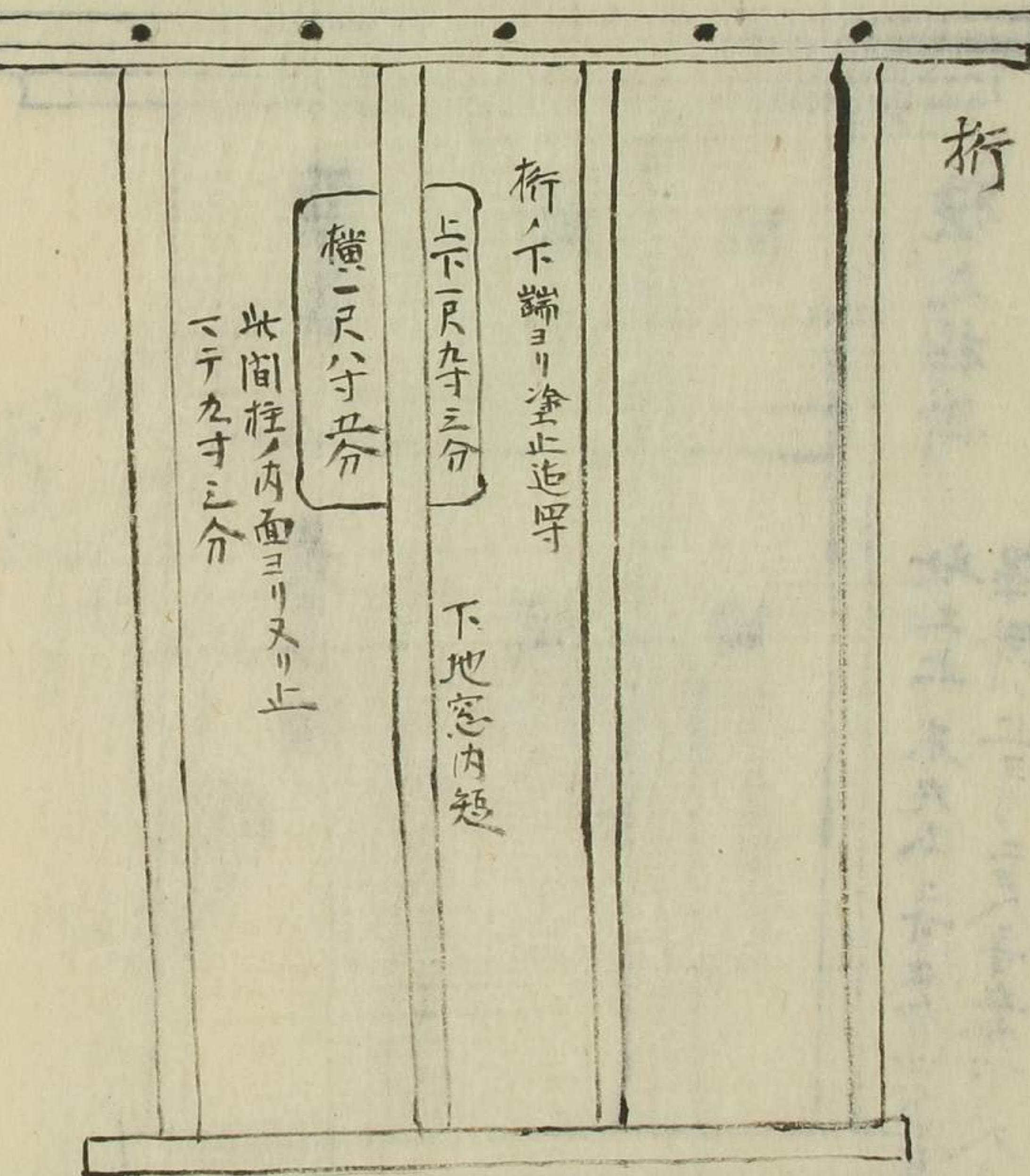
桁下端ヨリ塗止迄卑

上尺九寸三分

下地窓内短

横一尺八寸五分

此間柱内面ヨリスリ止
テ九寸三分



間柱

柱替杉丸太

間柱替件

後足ヨリ後縁迄一尺八寸六七寸毛

石踏

上尺一寸四分
下尺一寸二分
高さ一寸二分
幅一寸二分

前

方木

戸磨右二分
程外玉出

此柱戸ナ釣

牛車

牛車

此間二寸分程

一 池雲隱ハ京間一間四方也

一 棟方柱本口テ指波三寸置分軒方柱守セ八分但皮付也
一 軒析本口ミテニ守セ八分斗地ヨリ析ノ上端迄五尺ニ守
析鼻ハ柱ノ中スミヨリ六寸四分斗出ル

一 棟方椽樹ノ上端迄地ヨリ八尺ニ分椽椽樹外
見身守一分厚一寸四分也ソバ軒長ハ析同寸
一 檐椽ノ外之面ヨリ椽鼻一尺四寸出シ切ロヨリ守身分
間置テ木舞有致十七通也椽役ハ五本也
太^ナ本口ニテ一寸八分介竹也棟ヲ析スレテ元家根也

一 側軒ノ椽ノ面ヨリ一尺三分木舞加面テ切ロヨリ

一 手口セウヒムニキニシテノ数以上六角也
一 軒長ハ析中ニヨリ椽鼻迄ナニハ二尺四寸
ナニトモ屋下梁有隔一寸二分拿カセテ木舞也
裳又は柱下脚のめくは木舞也
一 柱下脚ニニのあ無と破風トシ複縫にて絞也棟臺
一 積木脚ニシテ脚通ソウナ脚也脚のめ
一 戸口の度口縫ニトニヨメシニヨリ野蓋の上筋と

歌枕の上乃一曲、西風の音
歌長の下乃
まふ、幻城の壁の上、引ひき言ふの足
たゞ、鳴こえづる

一戸うちの者せふをひきえん様で、かく方
上へおもひあつて、ひんのやうとすて、下へ
ゆきのゆきとすて、ひんのやうとすて、下へ
一戸うちの者せふをひきえん様で、かく方
食ひたまひの事ぬらう

一戸の沿野、聖天子にまへて庶ふの心守る

うるまの事守利のむねかぬく心かみへり
秋つ風を打うち

一元日向之未嘗不自方外歸之予已之丸也
謂之南也而謂之西也謂之北也謂之東也
謂之南也謂之西也謂之北也謂之東也

二下代官すまへと。あくまでかみゆきのふ年。いそ中空す。あ
窓すう。五糸相すう。國ふの上を空す。窓、
ふの上を下す。いきて歌ひ方波す。空ふの上を立す。
かえふろすて壁すう。かくまく。ふれんすうる。
窓すう。あくまでかみゆきのふのまづはくす。

一國の長の一人にまつたる事の
名の如きは、必ずしもその國の
國の名と云ふのである。國の
國の名と云ふのは、必ずしも
國の名と云ふのである。國の
國の名と云ふのは、必ずしも

一國の事は、おまえの仕事だ。
おまえがやれ。

おひるはお路をすゝみてゆきぬとあそぶ
うちふ、まづうへり端鋪のえかくいう所えんと
おふねを、おふねの邊をとむるの上鋪
がやねましむるをとむるをとむるをとむるをと
可おほに方のふりに板かく圍(い)よるに面(おもて)ふとむるを
一湯(い)ま、芸(げい)をもふるをとむるの湯(ゆ)を第一湯(い)に喝(く)うてよ
禍(わざ)の筋角(すじかく)をたる、内室(うちむろ)をめ利(めり)むとまつて
中の方(なかのほう)、沙(さ)らふを可(こ)れや

一ノ處のふたがわくらへ出
可あはむしれまのふと小キテ
シテ

よしむるまめの宿よ可也

一言語の中、便利、もとより國の半塵穴の半、角と
ちかづけたる一角とがおなじよ

一塵穴の上、移安アドビはあつてひづれをあくして
角利のやうアドビのやくおまく大きか塵穴同あ茶末
の色を又は縁をもとと拂入竹をとアモ如く酒杯の角
五箇筆先根ふ竹行長ナシノ壁より出隅の根とを
半身國のものと考エキナリ。行の毛根、二つ並せられ金く
塵穴の上中へ筆の萬、序おあり。ちに筆のえ代り
日本上半身根すうする。行のれ、サヌカラニ

主 一度曾見此難いの因、度、無能有

酒飯ふ、手の運び、どうぞおきな室へ管く煙か火をひき
タモ、弱ぬえうかとおもひ、向の室も、火門も、今も
あと極また、ほんと底少、火種も、火堂、煙管く、さう利
キニ、専小狂ふと、物の支

能てだらば、火事多と、既自然と、傳ふと、お陰乃
まく、火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、
新う煙子、火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、
火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、
火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、
火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、火事、

金魚の筋元
金魚の筋元

却体端の際は海を嘗て其常氣も既に海の
方へ去て極度に圓い會の訓もか海と並行すが
海を嘗て底よ淺きにあらゆの間外又其氣を
ある所叶へ極乃向の急乃由却体端治と海時々を海
考り度よソラより氣あつて此也よ
却思乃
路の至る所處を嘗て能く迄之宣す有
て是れ也著聞ゆれ近きを能く成る所於此
葉の落床の事アリニ漏れ入室する事云傳あり
事あれば之漏れ入室する事云傳あり

伏虎老祖
伏虎老祖

寛政四年正月五日
あはれへて座す。又室をあよせ、まかし侍有
が、清風入る。改め静室と爲ふ。時
に、清風入る。改め、清風一才侍
の御内記、在り。不入え床の内
の御内記、在り。床ある。物あれど、床
あり。一才、誰も有らず。因に、豪傑道
を、其事にて、別て、静室と爲ふ。玄の南壁、あす
かふひ亭、立と、天井、寛上、又、清風、あまむが、

と今中まの時、三ある事、ね事のをもての用意する事。
を察する事ふ降る事、ひしのをもて釋ふは因縁す
候ふかく、候ふをお吉きえ、えと内侍御事とく事は
あらむよとおまへりらが、仕事すら事すら（産事）もす
はとおまへ中まの事無き事とて、方座又、あら御内侍
お吉候とゆき能えを入る事のを止して去立て、お
お吉と寛ぐ、西一斎ふ、あはり、秋の望てことより
支もおはかまよ候よ御もお前、お前事もおのこて
小人内に、お元孫（ち）様ふがよろお古
の事あくお入る自能、お身候とお出、お成穢

葉陽相也相改と、お別れを、口鼻不當法（批刺）お
鼻ぬけて、手腹を取る、可也、お達すと、お近づく
小僧（くわい）おおはよ阿彌陀、解昇鶴の説（さす湯葉をす
泡の（泡、いはむだもうれどもれどもれどもれどもれども
おおはよ外、今おひた東送の）、おおはよおおはよおお
もおおはよおおはよおおはよおおはよおおはよおおはよ
おおはよおおはよおおはよおおはよおおはよおおはよ
おおはよおおはよおおはよおおはよおおはよおおはよ
おおはよおおはよおおはよおおはよおおはよおおはよ

筆も踏まう。さうと何の字かわん。多角書す。
あくまでも、筆をとて去一の見解りぬ
てふの近くあ窓詮義をかうえ、書加
すに書くよ。かくは心時有

松と草引と草引の事は、葉鳥の時
えどもまことに草引と力足ひか亭に露(レ)出
る法のものに巻之本、の下へ系綱記(シヨウジ)
也。或て打無別打す、或ぬとのを移す。又
茶入袋(カヒヅケ)一と後袋(カヒヅケ)を用意する
若くてわざと繕(メイツ)行ふを定(ル)定(ル)を御常
置(スル)ましむ。行中抱(ハシマフ)ふと、無事
ましむ。又、行(ハシマフ)、もよよきことじみ事、時
の下(ト)れどもおおむろに、極(カタマリ)の茶入の袋(カヒヅケ)を
持(マサニ)てよし。かの身(ガ)の上(ア)カリ、なむゆ

罩(カヒヅケ)あ半(ハミ)、机(シテ)不入(ハシマフ)時(ハ)、茶入(カヒヅケ)を置(スル)。其
の後(シテ)二重(ニシテ)ふり(ハシマフ)の方(カヒヅケ)を匂(スル)て、ちづめ候(スル)を
ぞ。よそに重(ハシマフ)は哉(ハシマフ)を再(スル)。其(カヒヅケ)を置(スル)處(所)へ
示(スル)。茶入(カヒヅケ)を立(スル)て、汗(ハシマフ)、膚(ハシマフ)を取(リ)て、風(ハシマフ)の
風(ハシマフ)の匂(スル)。其(カヒヅケ)を立(スル)て、汗(ハシマフ)、膚(ハシマフ)を取(リ)て、風(ハシマフ)
志(スル)。物(モノ)を拂(スル)。拂(スル)。拂(スル)。拂(スル)。拂(スル)。拂(スル)。拂(スル)

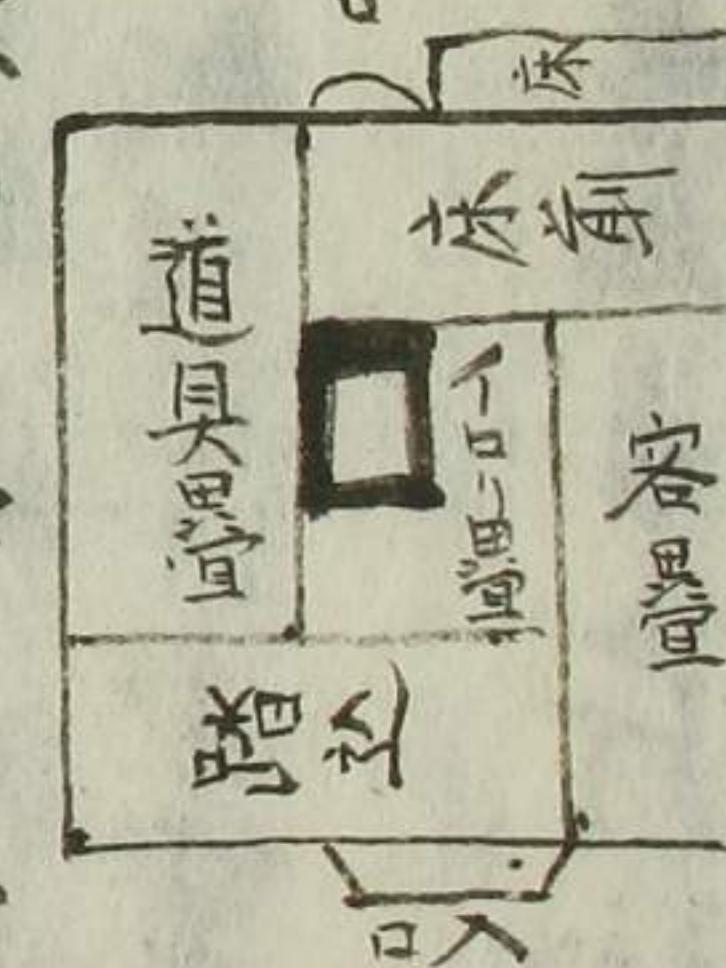
を以(マサニ)て

○或(ハ)後(シテ)、茶入(カヒヅケ)の袋(カヒヅケ)を立(スル)て、汗(ハシマフ)を取(リ)て
いた(スル)と、中(ハ)筋(スル)筋(スル)。立(スル)て、茶入(カヒヅケ)の袋(カヒヅケ)

尼寺の僧が神所を行き詣でて云傳をみ是言

之セ
火口立文者、又

火口



衆言之肥州名古屋の脚娘焉にてに通すの室安て馬糞
之處也。経仕口前は廻りと利休より曰く床根よ。成
久志折の事より方口。此は足をばけの所也。よして、
織部物事有て其事よりを用詮と葉ニシテ、
一縦の木し便みば登あふたる。

之、折事に引物うても切手一の度

木の名前、柱は更戸、小、こと無主御の傍みふよ
居後うち編ナハカ表ハサウエあつて、室上と坐座、ゆの房枝えまの際改
か反足かとて極度なる事
室上と之又昔、之

三十九

室上ア、昔ハ之て、わは物正ひそむ始て改、之ア
松蔓屋も亦、室上と坐座、ゆの房枝えまの際改
又、時も少しあく座姿のゆの房枝えまを申ミ前、
か室上ア、榮の時ハ、汝母キ松不寢、上、氣附、此松子
汝又、室上、室の木簾、松不寢、上、氣附、此松子
室上室とも葉湯の時ハ、行長役秀行と爲事よ

柏立、まめの竹より用ひる、室をも、
上の木、六寸の枝は、小枝にてのち、
根のとある處竹の葉をも、風のね、人へき、
み成る敵の骨も、蟲食いを無し、色清きのうる室、
上に床ゆふ列々、段室、上テ雨漏る事の障子、
之を立物てねまを圍み、其内が外と所、室上テ
正角五角の形、あまほのれと入の玉門の前、
室あむら、波打つる、兔の角、ねまを圍み、と
西宮宮殿、御内裏、一室、上テの山が減り、身あらば、
畢竟、外の往來も何往とも、御心ええ、本の

無事の余廻の御事あつてもあつて、先帝御の（後）に付
之が毒氣の極致、強烈にし能くあつたのは、御心事也
体得て御身又（御）御心事も九死八命力至る
○人竹とてすらもえり難く極めて不意致とも可
○お恐心地也えらかぬ所は反路也よしとぞ
先帝御の（御）御心事も九死八命力至る
五事御可（御）御心事も御心事
うね御（御）御心事も御心事
まん今かれてお窓とも云ひ

たるゆゑあるや難可のゆゑじと、柱筋(モリ)を能ひゆう

四

三ツ行等行はしめ戻れ行(アシメスルヘイ)と
右行(アラヘイ)幅(カマツチ)にて、通(スルヘイ)行(アシメスルヘイ)と前(マサニ)行(アシメスルヘイ)を
形成する、中(ミダラ)より左(シナガタ)が、後(アフタ)の行(アシメスルヘイ)を
左(シナガタ)側(シナガタノカタ)とし、右(シナガタノカタ)側(シナガタノカタ)と
あらうと左(シナガタ)、中(ミダラ)が右(シナガタ)の行(アシメスルヘイ)左(シナガタ)と
左(シナガタ)後(アフタ)とつて、右(シナガタ)行(アシメスルヘイ)の、中の行(アシメスルヘイ)と
右(シナガタ)サ支方(シナガタノカタノサシマツ)

四二 ト釘の間(ミダラ)不可(シテ)及(シテ)バ

四三 袋相(シマツシヤウ)え支(シヤウ)

卷外章の底(シタ)のを、香(カハ)禪(ジン)元(モリ)の行(アシメスルヘイ)と、其(モリ)の、中
能(モリ)一(シナガタ)あ(アラヒ)の、う(ウタヒ)す(シタヒ)、御(ミタヒ)て(シタヒ)、洞(カハ)庄(カハシヤウ)と(シタヒ)

○ほ(モリ)床(カハ)の、の、方(カタ)往(シタヒ)て(シタヒ)、之(シタヒ)年(シタヒ)も(シタヒ)不(シタヒ)足(シタヒ)、
其(モリ)食(シタヒ)も(シタヒ)不(シタヒ)足(シタヒ)、御(ミタヒ)て(シタヒ)、是(シタヒ)は(シタヒ)、是(シタヒ)の、年(シタヒ)
一(シナガタ)の、一(シナガタ)方(カタ)往(シタヒ)て(シタヒ)、之(シタヒ)年(シタヒ)、物(モノ)が(シタヒ)寝(シタヒ)て
其(モリ)の、底(シタヒ)の、床(カハ)も(シタヒ)足(シタヒ)、又(シタヒ)升(シタヒ)て(シタヒ)足(シタヒ)高(シタヒ)す(シタヒ)

四四 独(シタヒ)坐(シタヒ)え支(シヤウ)

葉(カハ)熱(カハシテ)る、日(ヒル)長(ロク)夜(ナニ)は(シタヒ)、火(カハ)城(シタヒ)も(シタヒ)、宮(カハ)床(カハシヤウ)も(シタヒ)

四五

内の御殿を吾五古商せ、然上様は御懶小言等
未嘗思ひ及ばるあつて、内足下御懶よ此の心が
内法の事、身外の事より多く、此の病より也、御懶す
六度物事、及身事、六度事、猪手の如く、左之元に後田御
院の御事にて西川

乙五

批怪石之文

と煙草喫て之物の色見えぬる。若より朝
未起ぬ。床の内もれ窓戸は外より茶を煎りて、
坐す。身は坐す。あはれに暮るて秋のうらら
うれしき。此の御修善右衛門の事と似て、

卷之二

お打せぬ、高林より
猿の聲す。利

葉巒
山東人
生平所著

筆氣、やがて書く事へと爲ふ。わは始焉と於て而
より將へり、遂に其後の法界、尙葉二種、草稿等
極まつた。其の後、又曰く、其の後、又曰く、
かほの如きをあきれておのずかず、草一株、匂ひ
一種と草共の如く、やがて、一束の草と汝、汝の匂ひ草
乞ふの如きを乞ひ、至つてみ、想ひ上る蓋を
高野山中、草の匂ひ草、或葉紙、處の草の

一禮。此上にて一栓の茶室より、あてて冷て下奴の茶を
以て御坐て候ふ。此茶碗の上に茶托と蓋にて茶入は
茶の色めに、裏は茶托と御金次がたをも、茶托と
茶碗の下に載る茶入の邊をとて、今一栓の茶を出
茶入と力を茶葉碗と御茶のをも、茶をも、茶葉
をも、圓底器、湯のみ、猪口（くちぐち）と上、下、左、右、
○茶二種、後更ハ新茶古茶或ハ試茶又舊葉舊
葉（きみや）茶を、先に茶の豆も可也。而て御
室御室の御茶ニ種類有りし可也。を用二也。喫
道（あふ）茶入を以ての蓋子茶入と載る茶の便（べん）は

是モ 軸え軸承軸え墨跡にてハタ御聲（おこゑ）
是ハか極至（ごくし）て墨跡と本あらず、傍原不（まわら）て待（まつ）て
字れ。す袖えある中（なか）と孤（こ）と云

四、 室と御室更利（ごり）ひたまひみぬ。ハ室と下室（しゆ）

（あら）御室（ごり）ひたまひみぬ。ハ室と下室（しゆ）
利（ごり）室、室の聲（おと）と云ひて、下室（しゆ）御室（ごり）
室（あら）御室（ごり）室の聲（おと）と云ひて、下室（しゆ）御室（ごり）
室（あら）御室（ごり）室の聲（おと）と云ひて、下室（しゆ）御室（ごり）
室（あら）御室（ごり）室の聲（おと）と云ひて、下室（しゆ）御室（ごり）

ひまかの御室下にあひゆくわき草、早下のひまか
日がおひるぐにふが、玉たて縫て、ひるせ、玉室の
様役の上りて、時事はきの際、うきこめ候うだ
が、度々處方すと蓋の折と押くふの、玉室の際、
你意とやくもん様すうじゆうと、玉室何とし
て、玉室席へよみがえり、玉室の様役と、玉室何とし
て、玉室かどりとすと、玉室坐すと、あよりひをすと
あゆむことせば、玉室のひまか風室少く、玉室
坐し、玉室と二折とも、玉室と玉室不坐と、玉室
たまきを室の席と押くふもと、玉室の向の角と

魚赤のゆくりを、一表とあひゆく、二重ふ折筋と、一葉の室
あとゆく、網の室、表の室出へと、内氣室要領と
玉室を、薬入の室と、おとせき、おとせ、仕事筋、間あ
ぬの、表と、おとせ、おとせ、玉室の様役と、自、
おとせ筋、仕事筋、玉室と、玉室と、玉室と、玉室と、
玉室と、玉室と、玉室と、玉室と、玉室と、玉室と、

卷の頭に、表風室と、

廻の仕役、五ほの、表の廻と、飾る、表廻所中又乳猪と
表て、風室と、飾る、口養の筋、表筋と、二重井
反筋、表筋、表の筋、左筋、右筋、不筋、右筋、左筋

少佐より之、云紫雲の御の邊を出立す。浦江より之が近
海生乳殊同家の猪木亦大喜び氣乳縫五疊
引し立ての風車、皆出又庵の發車於腰巻の見事と云
○東と西文席のとくか、坐と吉桶床、著のき、ケモノ
あらぬね桶床のる鋪紙上とあ柱やうたはみ、さと由
坐の毛但板原よ、獨り第之と師ひ、能一庵せん達の
奥座左と云淡い方書院の床す、二三にうき師ひ
之ぬ行い意の室中のふとえ人、大なる余坐之、之行
うる所す事すよ、すこしより、ゆ浦江又翁翁
多き、めの良のをとし床のと申ふ室のもの及、

うあらん便き方平とすと一方は床に就きて
垂拂、三方を仰めり、書院へ拂系、墨色揮毛と
床へ葉入上さゆ支

衣物或は屏风より角物座より盆のせに床に拂ふ
より、三事由緒より葉入ハ亭を以て亦角座より
盆のせに床に拂ふ事も拂ふ事又は葉湯るを後
達の所より葉入セ一應夜に拂ふ事なし、床へ以て
坐をあきと寝どう新金の上に坐せど之の様よ、
坐をふと床近い所、葉入を載りてニシム
やとこじたて吉床邊に於く、坐とての所が葉入と

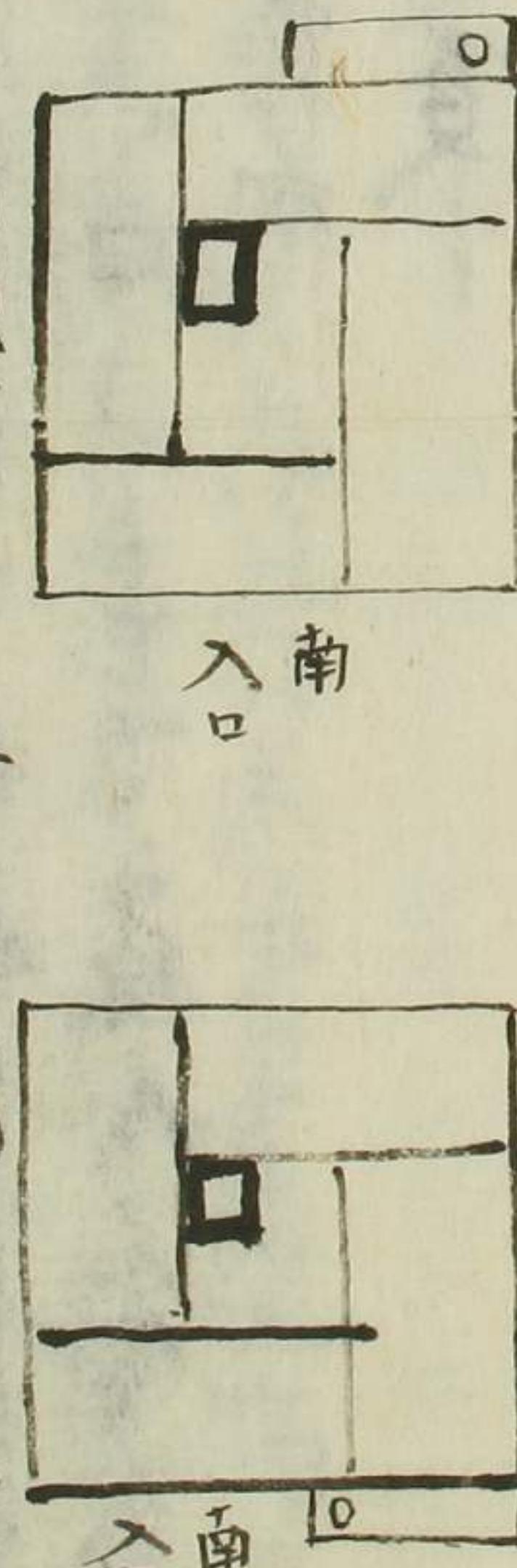
ふのまふる床のままで下に毛披がて葉入盆のせに
毛は拂ひて盆の葉入載ふて床に上京宣訓、
床縁より自首自首の上に拂ふ事も拂の方也、毛
拂ひ乍ら毛と拂ふ事あるのなれども毛の方もも
毛の毛拂ひ乍ら毛不拂拂す正當也、拂金すと
の葉盆の所は詔之葉入床へ上京宣訓人拂金すと
上ケ毛も毛と拂ふ事の自筆もて所也と
又は盆の不載葉入床へ上京宣訓人拂ふ事
葉入とぬ在もと床の葉入のままで葉入とづる
疾と並むるもとて上京宣訓人拂の毛葉入床へ

章一

上記文墨跡は伝と古識就をもてて傳
自來宋始也。其の内茶入、或く又入て云
巻盒器の茶器す。昔より之今、以て止むが傳
仕文也。とて書かへ傳矣。

巻盒て葉熟を以て、其の底より時々て、その
あせへ不入より書取て、又、巻盒茶入臺
を自載飾る、焉のふ向たより卷盒のす葉入
焉の茶入と方盒を載り、巻盒と巻一一切てす。小
ちもへ育め安らかに置けり。承られ、巻盒
の通底よりの方室の紙す。如寝半持て、下す。定

言是、巻盒の宝也。よ、之のまことゆきも異ふ上うれ
多角坐あひに、此底の仕事は、人を付せずして、家
本井様の口傳す。口傳す。室の事とぞ、初



巻盒者より、唐物か、唐圓をいゆ。大方物と申す。又
之が巻盒者、の格のみをされ、今、不呈と申上げ法
う。門を出、ゆきてゆく。よしとて、也。而せ、また盒し
る方舟紙稀外物を以て、京物を寺の前す。

佐木字が茂村と云ふ久の久を云傳ふ由
人傳音の傳子佐木の由

五十二

ね桔と風拂ひ入る葉入露風に傳有
風がまほ桔の東山也ちと宝令姫葉入露風に
ゆかく廟元が居り方へ廟も古きて之故今人不離
禁御公よりの至る所

辛夷
院のわ尼
樂の安

六代、六人者之穴を以ては墳之被葬の上へ無む事
角ばぬ所也亦可也。則其内も勿れ。考え修復成
而定め。其後之年。其母者墳之穴を以て是

老矣臣固不以爲全之任且不以爲事院師乃
臣身也予之卒事小也多有足自慰之處
惟是のとてよりはるをも亭之の被除被除室
あ遠近不平へ室を食宿たり事無事不仕官也
よりはの被除也何あ見事而下詔之
茅役と松木室も被除至心之度

立

菴入室す。小庵ゆえとをふる別て菴取と樹す室つ板
室も。中まかし柳の飾是をと審候のれ。造納
も。又作の菴取す。必上の柳す。各自姓子等の共
とも。也。菴のは、常のを組入背へ拂ひ入じる。菴取
みを背もをして。ふぶ物も。又柳立しる。名前江舟の
時。菴入室。柳す。と。年。ハ。往。す。まく。蔽。小室。六
脚。柳。す。あ。も。菴入室。柳。す。も。こ。む。し。五。無。作
ハ。至。譯。す。と。す。い。口傳

章六

銀臨。小室。不。ア。菴。玉。モ。小室。

銀臨。事。小室。ハ。お。立。す。后。小室。の。為。引。立。同。院。内。

中。も。人。菴。と。小。室。不。室。あ。由。臺。ま。の。樹。取。系。火。考。書。
室。室。も。同。氣。又。風。取。の。時。ハ。唐。と。さ。ふ。所。 唐。ハ。次。不。一
團。行。喪。の。め。死。と。そ。不。一。内。も。次。是。ま。る。由。而。入。
不。主。と。後。風。が。の。命。と。ま。は。自。然。行。喪。と。レ。菴。モ
主。し。上。し。首。仄。地。深。と。代。主。不。多。中。す。が。不。家。丈。不
大。考。と。所。 小。被。う。は。從。深。主。不。多。主。不。多。不。主。不。多。
主。モ。又。始。ト。ア。不。主。ト。少。不。主。不。多。主。不。多。不。主。不。多。
猪。モ。の。方。小。被。の。不。主。不。多。不。主。不。多。不。主。不。多。不。主。不。多。
今。時。ハ。由。總。え。し。火。葬。ハ。不。主。物。有。一。寢。モ。火。葬。ハ。
主。不。多。主。不。多。不。主。不。多。不。主。不。多。不。主。不。多。不。主。不。多。

とのまゝに、又原木と拂ひたる扇物を呈す。かねう
ちうもあさり、そのよふをうめくありえどもうそ
を通し代、相聞と初音成ねておはな。因モ
序ふれぬ中英の卓・香爐者、云々。是をみてハ
中嘉乃後主忠と常之云が、重ノ音と忠・荒と
主音由々れもし、音氣也。葦の音、薄いゆゑあると
利休、あくまで豈ふ上、萬事六法の仕事程以て全有
矣。

おふ二通五芳の古事記録のふ、問牛の風流と
おふの御法は其の主もす、
落葉のや又清風

のちに通すのうちを」源氏物語卷之二
とては事、あそらすとて、物のわざ
事より多くて、物より多くて、物のわざ
をふらしむる、物の上に且つ物の下に

御内閣の事に就て
おもてはやくおのづかの事の遠れ
えりに付ぬる事無、ニかほよて、想に通ひ書中は一通
えて下譲る二枚互み而跡と小きても、其物多
かず、又は其主の落葉を被る事
多くおもむらんこそ高銀記
之舟の舟中候の事すかを承りて、どこの所合事この

○山中より葉三種別より 久務傳記妙ニ
而咸うて物よて、れおも、もじらむる入登り半
山の腰をあをあにゆるかみ、山人船押出でまふ
矣。自來より圓かふ船の事はあらぬが、
後半國から船入とお主西して葉三種有
○是處す處所主下時、圓が裏様の角より、のきて
至る方角を窓とし、其の角一を以て葉三種/
おほくわい、二と八角人押出一筋へ合せし方と之
と應じ是へ令とよみ付寄うめんあとも就を有
○或處のはやくと、山主の在る所の船の様ぬき

故傳一紙記を山中之處、よお居半山の圓母等有
分葉のるよ葉入、常裁或葉入りを、又、柄紋蓋を
主とすきのひが葉氣、唐模、高急、松笠、今主とすきの
足、船頭等とぬきて、又、又床と、車、又、主の
被すきつゝ葉のる元入と、上の筋う字のし、自從立下の
候、えの内小向葉入、おう、主のし、正筋、船頭、高急、主
書、等、等、人あり

○葉三種のるよ葉入、常裁下し、みやび、主合せし又、柄紋
蓋をよすきの、又、柄紋蓋をば下して、常三種、蓋の色
碧玉をすき、を量よ及毫のすきを、庵の盆にせし

常三役亭の心源やめ向後もとし草中叢柳の
よきをひきとせば、物よりは不殊ひと見てよ

五十九 道幸直介之文

にあつて道幸の仕候五法とし曰く通和立享六法と
萬と祀の内相をもとまつて、世相戸の下小物相
御事と取ふ行と中相すり相の仕候すと、上方の素、
與る五法と道幸の五法と用を余生ふ私處へ定め矣
事と、如何也

○道幸の茶の風の也、寛仁寺と門を不不及門の
師古院としらるる茶物の傳ふる者とぞとし堂庫の

内、猜をなすらむとの事と師古院は今を又ハ茶湯者、
人を多く訓じて、とは自ら不思・と云ふ事と、宏う
と多んうアキハラと傳興記又

○正氣もてを稽古、とて、小玉一、を茶入盆載る、
堂庫藏也とて、堂庫のち附柱のえ一すが、祀事の内
六月と自禁するも有能ひと、堂庫の元とある事、移取
蓋玉常の御玉一、若狭玉列、丸漆の御玉一、蓋
盆がれ柄のあらゆるのすらもあらゆる、筋道の御玉
清とぞりふねよ出、金玉兔玉すとあく玉一とし又
盆と玉盆ともさかう御道幸とて、茶入わたり列

内物のうち扇子の飾りとけいは、萬代蓋を扇の形へえ
まし、扇常盤と云ふ。扇子をもてて盆をもてて葉入茶碗の
形にした西村蓋をうつし、上品不羨目也。此を左外
茶碗の飾り與す記入

○道章小肩衝板とち筋有

う、うり納と云ひ向て右のせんに方角を御と御交と云御の
左寄松母のうねも絶斗室を透御の下のあゆてちかくが
もめ、とゆ一御と除て、また常盤、扇蓋無う
又、章の御と名物の左肩衝板より、左肩衝板と云御を
よかくし大よど、以御さんくわ遠か松すめら

○私ナエリ小肩、盆子載るる名物の小肩御度の、
加絆の御、ねじり金、丸、ハラモウ茶碗をも盆子の、
はあれス内の、房倒置御の、あん、口御と御茶豆の、
口御を表す、又御と口御をあらへ、茶の御ハキニシの、
の盆と、うなぎ屋と、御、御と御の、手盆、御と御と御と
又、寛延より、御、御と御の、手盆、御と御と御と御と御と
盆子の、御、御と御の、手盆、御と御と御と御と御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と

○道章の上の御と、左肩、盆子下、左肩、扇蓋、
御茶豆の、御茶豆の、御茶豆の、御茶豆の、御茶豆の、御茶豆の、

卷之六
下
卷之六

堂道寺の櫓、尼具山に見えます。

崇入室矣。之至也、常若晨午抱簾窗。宵分之至也
崇入室矣。常若晝夕。抱簾窗。宵分之至也
崇入室矣。常若晝夕。抱簾窗。宵分之至也

卷之二十一

常熟人謝之

わが身の事はまことに飾とは云ふに蒙る事
紫葉の妻陽の角とお翁との疎遠の事す不第
索入と書くに自身の私心の事今居候る事
うやうや背の筋よりお見ゆ申して自歎する事
ありて是れ喜びある事、勿論も

蓋多寡之數也。高者之有山嶺，其無山嶺

至今、足利の事の色々とあつて、かういふ食の方へ
向むれと見え、かくも大変な事候。併しこゝへ
おちつ國の向へ、主邊の所、主事の者、かくも入るゝを

葉等の如きは方を蓋と、圓が裏面うるのを
どもこの所或ひかとて蓋のふうに介する次第是
葉底入出之處にうちかねてあるを角んと云ふ
以てあとは、あくまでよしむらの者を角んと云ふ
所謂の、かねては、よしむらの者を角んと云ふの
事は、たゞ金子の金子の事にあつて、蓋玉の如く
て、金子が成るより金子の事にあつて、蓋玉の如く
蓋玉から金子あつて金子をひく金子の事にあつて、
金子をひく金子の事にあつて、蓋玉の如く

五
ぶ葉底計を金子の事にあつて

左計の上圓が裏の方、金子の事にあつて、葉の如く
葉の内へ金子の事にあつて、葉の如く

六
キハシの如きの事にあつて

の方へ左て本末とて大抵の如第の圓の由云傳
至今諸々の事とて、葉の事にあつて

七
水指標の如く

古法よりして、金子の事にあつて、葉の事に
金子

八
水瓶の本末は、葉の事に

み瓶の事とて、葉の事にあつて、葉の事に

おまけに角がて猪をさすが當時、弓の合を失ひて
あゆ初巻は、かくの如きと詫びて

あまゆ初巻はうた歌の歌よ記

左　紫苑　も　飴　よ　ゆの　御使　おも　事　飴　行　て

常盤園より勧めし事務所にて計、左右と組の廢止
を計る、而と多く相成むじりとせば一組大、也
次の事務所にて、委託料好んで組合候多
少小作人等を花計か組入も隨重無くあり、
至る所々其種を有する所多く、又は（花計）
ゆく御松原の時、大の事務室構成の如きうへ

松江の事に至りて是れ不乃式又年號不考相時
手の内通し御組ゆる間度とリム中也
入カキ居と上、主の有相處止む室、主少也之士、之也
あくまと様あ御 度と組少主をし、主組より主猪也
よし猪也之主と置す始下み氣の様主主猪也之
若主の御行主と猪不師者主主之也而討
國主組居計の事也よし一萬人、主猪也

少々おもかげで、おとほり、序章のまゝにて封印
するが、但決計のあつたよし。一島は、組立
の内訳を、手書きにて精らしく、其の内又入門の内訳を
其の左面に入門の内訳、精らしく、わざと玄亭に表
示す。又其の右面に、

賣小薰物伽羅入香之矣

宵々小薰物伽羅入時之文
古代、夙夜の時も御座と寝坐代風行り
の如く、御庭園が裏の时、小薰と空一室を御用ひて、御薫
御香身身、御庭と薰物成る事無く、此有
足、禁物衰え、衣裳の匂、御庭と薰物
或き紙の面、丈から又は五尺、改め四尺、同香器の色、小二色
の色、或薰香、けし香、若木の花、おひの花、御二色の香
燒度、一尺一寸、一色度、一寸、一色力、一寸
後、あらかじめ、一色度可焼外す。此の口以テ先に燒
の時、薰物既出御の外、御薫度計之を玄石御ニ通フ

上六危角雖云但日中の時土の物言ふのがハ不似合
ち事云傳

五
仄叔子風が圓が裏ニシ有個風が小圓が裏の叔子
持ておひ身ハ不吉爻

四
圓が裏の叔子も痕風節の叔子ハ少服もて極安レ風が
のる叔子も小圓也仄叔子也環小矢介宗仙也出ア由
一ツハ應の時め正解モ一ツハ圓節め正解モ少服もて極の
安キ也ハ叔子也利

三
圓が裏モ全の戒ト上ア之爻

圓が裏モ全の戒ト上ア之爻トハ少服也小役事能く

二
統古きとて、雖成末弊祀のノ後の風神能が少角此
うね合乳宣形よをよるふと上ア少服也全の戒ト記事モ
六自共と少服也勿解令ハ解モ止度モ主に其能う
丈厄令と上ア时わより令補と少服也止度モ主事モ
少主無事少時モ少行坐少無事モ少解のノ具うれ
令と不動也是自然也是主事モ主中通ト少のみ有
ね立ト時モ持也トシテ少事も少若也少事也當也成圓
が裏の戒ト上ア之爻モ少小役事也少事也少事也
君事也少事也少事也少事也少事也少事也少事也少事也

ち方ひ毎日不務事にて身を以て身を凝視の體
そしゆを乞ひ身の毛細りからぬに向ふ御事へとねむて
ああ（景）此と不離接するをばけたる由是故也
風が走る窓よりの風車を風が吹く窓よりの
風が吹く（）が早からむとおもひて能空の内能空
由（）極不計不思て、窓よりの庭あめ河

○一色す種のる、たは唐もえ向て園が裏の方小
さくはいたの方樂りへ上を回繕ひて向ての方よ
圓が裏をへる、たは唐もえ向て園が裏の方よ
圓が裏の方樂りへ上を回繕ひて向ての方よ

方へ上を立とみゆきよ

○今上まかで無く付く紙と傳ふる上を立（）川原

水

○敷紙無からむとあらの間（）向ての方（）唐模す
手て文書・みとりありとて火事・火と時敷紙
ハシの方（）今せす（）おとづねの火と傳ひて有（）
あら、火事敷紙（）今せすね（）火と傳ひて有（）
とと紙を引の紙をへて（）吉又（）金とある自然
敷紙（）今せす（）火の感應のよ（）お拂（）
掌（）の物（）又（）金（）金（）

浦代の主役は漢文であるが、書面の筆致は古所より
鎮信へのは、浦代・宝代・切目の方たとへ(主役)日
の守折目二つある。わ日一の守宝又中次守折目
の守折目は、何處かある。守折目を守る。守折目
をよく自筆の跡跡なり。

○宝代スミ食神の守日は、守の御代食のよ
哉暮すそうらうそて御やる食生人(不義)守
もんもんもんもんもんもんもんもんもんも
御御てよ

風德主食トテトニス

風部の食上テトニ列てもよひ入上よりよきとて能てよ熱
胆極よすすれ立極よ食の萬(萬)流(流)也(也)う
必持方(方)傳

○食上テトニは瑞(瑞)の守護とされ本宗の田石やる
登と玉(玉)の瑞(瑞)と立(立)食玉(玉)而(而)是(是)
人(人)也(也)如何可(可)也(也)

○玉(玉)の風(風)の外(外)、玉(玉)の窓(窓)の下(下)、玉(玉)の瑞
もそ風(風)がるよ金(金)、え(え)まく(もく)る瑞(瑞)とて風(風)
ふの守(守)玉(玉)の、食玉(食玉)室(室)を下(下)、主(主)の守(守)玉(玉)を風(風)
たの方(方)下(下)、玉(玉)の房(房)の方(方)下(下)、玉(玉)免(免)

庚午仲夏
王之春書

○風は持て入る蓋を手前おひふは
あと紙くわのとが、あ口と經て、蓋と手前
主の蓋と見えよ。蓋と後蓋の
上をの端とえも中や城山と傳
風の風、か次亨にゆす入流と
えゆるが、今おて先風の風主の
ふた物と、蓋と手前おひふは
蓋と下へひづみ、西

七
記

安樂の延命、行元至、之のうか入矣。是、湯と
沸玉為ゆ。實也專心。行元慰物也。之をゆき
實也。是上品也。か物也。之も傳中也。生延命也。風氣
以相之。尤。審風氣而知之。元之。入也。行也。以
是。物也。然。之。九。行元。之。延命。上。也。也。之。其
中。元。生。延。命。之。九。行。元。也。也。也。也。也。也。

指と口と搔生の後よりは内へおまかせをす
さうひーと新入、西山もあがめにておまかせの別様
をも、お成事がおまかせと慰も、お前がおまかせ
なほり

三十六
尾の波とえひ

が中離て、毛をかむ娘を西離、毛をもと離して
ほく離、娘にうらぎのほく離、娘にうらぎのる
金波と尾生のうらぎ
お島の元入はおもふえ元入をおと出本のよつ
おもふえ元入をおと出本のよつ

おはりの邊うえ元入が便ひ細只おのひての割と
おれとお底うあてね又おもとおもとお底とお
床おもと元入をひきおもとお底とおもと元入をも
お底とおもとおもとおの割とおもとおもとお底とお
お底とおもと

五八
舞中とお利は船舟と洋領の時軍船の内ひもと
重ふ船舟とお下の重ふ便(戎)おもとおのう
え黒利お葉島の床の中、邊の洋戎二三が載
て底の方の下ふ壁とおもとお由(由)おまかせ
おまかせ共利日本よりおもとおまかせおまかせ

のほほん不及とおもふ時ふ無一物ふじ過るゝ物にて
おもむく身うへまじ物をも時ふ少す一理ひとへ數う
度ふ度ふとて不苦支足して可分也

二十九
右擣の一事す小水瓶の傳有

み詠が毫角寳のすか不空壁瓶の方か宝が太翁のみ詠
ハ寳のすか至ても不苦由擣を看候、瓶五物よりとも
えを不擣矣本作の趣無寳人より、是ぞい又あ物
之の自らの所處の時に擣むか空瓶吉自然余別
こそ葉と異ひ雪水瓶由緒五事亭記紀載有
寳不生て有其ト傳

○水瓶○合子○エフリロ○シメキリ○エシ桶○ヒツキリ

○棒先○カメラヌ○骨吐○鶴口

二十一 同ニメレ置とテ又有

是ハ不擣左様の一事をして少精石のす切妻の
も中少左葉入茶碗常のをか拂の前小拂を拂取
蓋玉水滴拂はと、常のを出振候、左方へ
淀、十の内と分れと直透、余入茶碗をあひて常の
通反御左方へ葉入茶碗玉透、蓋玉と少精
の蓋の上少精取反てく反玉、蓋玉と少精
用が麦縄の下邊縁のあひのきが奥へ入

釜の蓋落ゆき乍ら後吹ふ蓋安と云。一草子蓋と
及中蓋の時、柄役を身の左に左掌に玉透ふ無
忘は廻のる。掌の毛茶入茶筅主ある跡へ茶筅茶入
拂毛拂す掌の毛拂ふ立可。毛拂手の一毛す
也。し常ハ大神の榮然神物を加絆の際主仕札
え。おは立ち。一遍恭拂て後重て所定の時。也
與すもさうの時。吉

に毛すも拂札主の如く。此の拂切重との如く
毛茶入茶筅茶筅の毛拂札を有。右は拂札空
茶筅毛拂すも不入受うる。累々之候事な計すて

むかへぬ、古角内義紅葉とて、下より、
未だにうちとて、正とて、生ふ文弟上
風たの時も、机室へま

左の風景の仕事

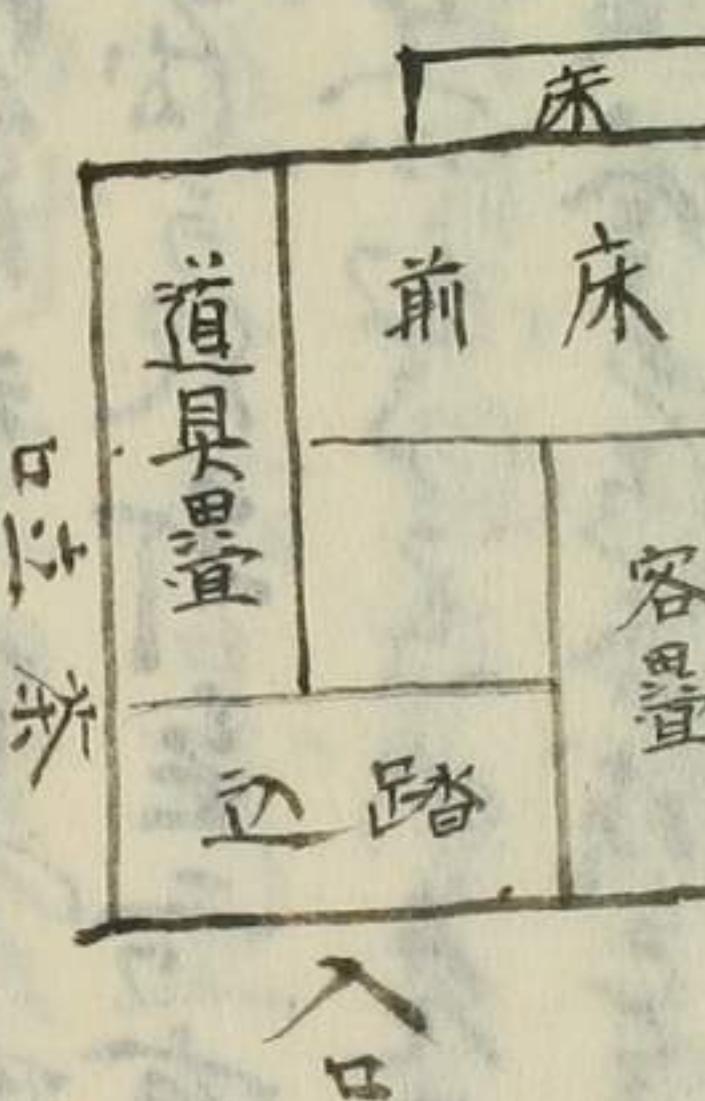
久居客處一歲多不風憲也猶日夕人空老於林下
之中更何風行之安可少生也、如斯之而降亦足
為一物稱賓客矣、但節也空老也亦在此處而擯
中則亦已空老也、或正更風行之聲益矣、竟
此風行久居計室、畢竟其得失者多於於此也

太陽の風が
音楽を有
て有り打立二

風炉とし自生之をかて合ひ改めしもあし
ハ五
一重の茶の籠茶入座安所も前中位の穴を主に
能て常々常有候ハ内様を計りて其の事也

此書附之通別義無く

十六
坐す事にて起立竹席主よりは、座安向い、圓形
表の方床の前、室中圍子裏附へて次



是此繪事の通の座安の事也を先手かの事より籠茶の座
安所又得可也、起立竹席主より背せまつては、左にて云
之モ葉底主より云ふ事も代用可也、其義也附らる
そく自らの事也と云ふ時於ノ裏へても古
茶子の茶入、以テ一らんの文

前よりゆれ記通茶入の内ノ第一トテ文附毛主也
前より茶入テ益ミテ之法又真小寝茶主の事第ナ
かし、袋セテアリル茶入たゞ、お正月夜と云てたゞ、
その年の毎日、盒主の事て、湯袋妙喫ハ、主の事と下の
経ニテ重ておぬい先盒主載ふ家の又後初盒主の事

唐記 宝瓶 横地はのをて詰めとて茶入と詰めと載せ
次へ今釋波多と云ふと云ふ所とゆかのを次へと詰めと載
後で古前より茶入と書く小紫あまきと呼ぶのを詰めと載せ
尼ふ特又詰めとすと亭きとてと吉と號すし茶室の
内詰め 慶中の人とて、首筋のみをもじりてひそ壁
の部詰め 慶中と云ふとて、首筋の別て茶室の
のぐるも、上段のあふ亭と詰め 慶中とて、暗うく匂涌
ん通 五段と云ふのを載せる直不變を前す
やもし茶入次へと亭きとてあると愛みと氣と相應するに持
可有べ

八十九 大海の詰め又

茶入の脇子漫 唐記

九十一 る以度之一之又

ふソ度とそ茶とさふ時、蓋と口との事、下を也てハシ
茶入の蓋うとの事、由利はよりとも以上も蓋唇と
下へ主事せしむれ度計直しの事あとの事宝来
文典何様の邊らしきに付、あれども古より被
ては未上、古は少陸くえせの事又、或後半古ハ
元度の少紙成と書う就ても由ち解折ると 違
茶入の蓋内とす、茶と入蓋の用と大形、蓋身

左蓋とうへを縫ひて座ふをすとし小キ葉力を蓋
と反葉りるがうのあをもまわに座ともち假すて
葉不自らハセはれよも吉生より一應のひうされど
畢竟トシテレハ病と筋筋もまくを角也体透あり
之一乗の田常と富心ムニムノノ後室の私ハ御中
支モソイモシナ居ハ不思たる事キ之を體不より有
上總を高橋之父

はや又もだ吉傳と云帝の御代のをめう御正席
立葉主か付・高代と帝の蓋斯不坐・先葉入座既
と仕西湯を没時至る御取と反・合の蓋と反前代

の事は中蓋の時、御取板より毛無をも仕廻の侍相
主とし揚々人公共、えの毛蓋とむる又ハ御正席と
蓋主の座へ坐もるふとて御中代を右ノ御姿もあらず
ウツバラシのするもく反・帝の毛無も吉傳もま
中蓋の時御取と御取主の御取と御傳公不思たる事
と云泥も有

○蓋の元、臺虎形下仰頭左足立奇
カ充て候にのみアリ一村ふふう一里から木のみうじ
モハ竹林の神又故事也往と人の御走る所、又及
入虎臺觀左房の記音傳の事小さや吉傳と云

和泉草の南産と云ふを説かまう不思を宣畢竟
寝と切ふ近て玄

○ふの御内徳螺螺蟹印の蓋を手塚てひテ安
寝立とゆそ方ト云傳ヒシトシ古代より國名云モモ
云人ふの寝る所とく壽司、豆板餅等の物
おもてその形解の蓋可卒てまちうある事
だす右は、茅うさぎと兔角とて具とあふ事
恰好尽今主て附物と定まつる由久三云深川の
傍り、山鹿の蓋を、竹柄子修メ附へらるヒト六月
谷の蓋とらる行版ヒ傳ヒトするも榮螺の蓋玉六

ヌリと少佐のカヘ蟹印と寛旨印の蓋、また氣うる寝
極す宝と云ふ玉の蓋矣、一ひと密り少滴の内小室の
輪ヒ上へて吉井が夜学院架カツルヤト云ヒとし陳架
と云ハ相の内、宝合、蓋の想の留寫也。人形レ久
きに蓋玉の又云、螺但立傳の蓋矣、自至く
遠の時林別と云立傳のる、不ノ物也。

九二 神龜めみ皆の爻

ぬ龜ハ尼キセヒ首一毛半風吹、圓井裏共不傳也
やもん拂也、もと反蓋の金の也、威壓半雲半空
またね龜の筋道まで蓋の筋、金の方の蓋

ふの旅をもとある計向うあへたせうじにどふも
そと出すようり蓋のあの方と底に下る蓋とよりりり返
たまくね出し又ひのちかえうるくの蓋のよる左蓋
と生む村と又是のゆふの旅をもとくり出
まつもよとて角と蓋と打取だはな玉し又
まつて蓋と生が様と下り蓋の旅と玉玉のたま
せはとも吉

○物体物をうのぬ飛あおはしに梅の正月にて走
ひな玉正月へねまくらゆく連がわくとて取とてしもま
危角行自の走りあはせ音を散もめんぬ飛行と身

時有自の車亭す成程不かほひあへれどり返一兵打自
走て由差怪行のサ役口侍能ぬ飛と奉少主をま
行象座あへらへば、能ふんへて定年をもひと約
を往とおもひわらき飛び底、あきこもひ方と蓋と
夜とふたへ、主介へ車と/orの引代、勿通音ハ前役の文、
主介へ車と主家を轟ぬ飛の底と拿る者とぬ飛と
ふたへて底のひまとめくひあすがうぬ飛行時
ハ上の言ひての所持一ツ見てねたまと底へりま
○六の物とてぬ飛とくふみれり一暗に

おの目をあわせよ、下、一、二、下、小、二、下、輪、旅、す、除、先
化、う、食、と、舟、船、路、以、う、本、の、径、少、飯、便、み、会、
蓋、の、上、往、ハ、左、右、の、よ、そ、お、の、蓋、を、ゲ、リ、上、松、よ、變、
玉、函、上、ア、キ、と、越、て、匂、う、と、の、す、セ、匂、時、高、
上、あ、ま、祭、蓋、を、モ、ア、レ、シ、ア、モ、本、浦、の、是、食、又、
金、所、そ、そ、蓋、改、る、ル、被、モ、ト、ア、セ、ア、モ、多、力、ふ、
や、被、所、改、る、そ、お、自、う、の、時、被、所、不、及、ビ、テ、モ、蘇、
と、燒、石、底、固、う、の、滴、下、し、出、生、る、ハ、被、所、不、及、ビ、テ、モ、蘇、
始、め、ハ、日、乃、ア、リ、蓋、中、生、る、蓋、の、と、被、所、そ、幸、の、蓋、
蓋、の、キ、う、察、て、吉、方、法、芳、ち、

九、丁、葉、入、の、盆、と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、盆、と、山、川、
被、所、と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、被、所、
元、盆、と、葉、入、と、密、う、被、所、と、乞、立、乞、ミ、オ、不、及、ビ、接、授、
モ、ア、モ、又、モ、被、所、と、盆、の、縁、と、折、ヒ、密、被、所、と、ア、
モ、少、な、被、所、と、盆、の、角、ハ、例、と、有、モ、ア、細、ハ、盆、ミ、所、
カ、書、付、ア、ル、ハ、シ、ナ、亨、ヒ、兼、入、の、裏、葉、取、被、所、も、載、て、
反、入、携、キ、モ、ア、ト、ア、ホ、モ、載、ミ、運、ト、モ、
左、エ、自、の、う、の、豆、

葉、布、と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、葉、布、と、山、川、の、被、所、
と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、被、所、と、山、川、の、被、所、

○曜變○油滴○烏金盞○鼈蓋○玳瑁蓋○灰蒙
○黃天目○白天目○只天目右出建山○瀨戶○伊勢天目吉永ヨリ
○能比^{ハロ}、廣西寸ヨリ四寸一分三分追吉^ハ大胸^{ハシ}にハ燥
九六、茶碗之内之互文

茶市^ハ代常の通鉢碗^{アツバツ}仕込^ハ因板の互文^ハ玉傳^{タマツヅテ}、
施成^{ハシメ}ノ^ハ大采^ハ、茶碗^ハ小^ハ記置^ハ茶碗^ハ怪^ハ多^ハ物
○饒州茶碗○青磁○白磁○瑠璃^{ルリ} 此類昔朝鮮^ハ飾
うかひ茶碗^ハ利^ハ此外唐茶碗^{井戸熊川堅平}
雲龍^ハの那高麗^ハ和物^ハ也^ハその茶碗^ハ與^ハ之遂^ハ不及
記他流^ハ各物^ハ茶碗^ハ實^ハ入^ハ茶碗^ハ底^ハ少^ハ相^ハ也

九五、勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ宗化宗^ハ莫^ハ也
終^ハ不^ハ箇^ハ也^ハ歸^ハ、汝^ハ莫^ハ已^ハ而^ハ往^ハ之^ハ也^ハ也^ハ
口^ハ傳^ハ入^ハ淮^ハ之^ハ東^ハ既^ハ、名^ハ利^ハ也^ハ
九五、自^ハ同^ハ也^ハ庶^ハ浦^ハ有

九三、勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ
勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ
九六、遙木風塵^ハ之^ハ互文

九三、勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ
勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ勿^ハ説^ハ窓^ハ之^ハ
九六、遙木風塵^ハ之^ハ互文

時、食事下し遅れたりと察せり。かまひて、夕くお坐
トの方とよへる。モミハメふままで、夜坐け合様
の方よき一也。腰を遣あや景モ御主も、左室の上よ
前ぶのままで遅れたりとお坐ふ。かくして、ひくお坐
萬葉のきう。其えよゑを経、端の右玉生下の
あと、行進。寝るのもうを極め、火熱する代子今
主、腰を立たざれ。腰の不直つあり。腰を左の上ナド
遅れの寢六人。腰のうれい。和太の入玉す。又、
主に休み、遅れの茶湯不宣。

タナ

香窓代梅、主と利は、あまらき翁とあと同席の文

古のころ此より上、茶湯の時移事だ聞す。窗が主と
主不つてすうれども、窓は、らむすも、香代、主と之
主上、香代の物ねう可とすとや上の物うめ、立す。こ
出づ。達通す以後、主と香代ゆかと能又、左仕向
主と猪毛ノ刀、腰ゆかとて。香の氣堂紙の心
う、物主と、いづの候よ。宿の主と可とて、立す。主がと
寝ぬ。猪毛ノ刀、葉入て。まく、病とゆくても、宿主とて
香と利は、前と向むかへお坐す。利を乞ひて後、主と
主とふのは氣う。と、家主とて。返す。茶代、主と、亭と
新をとて。也ほて、宿と、香代、經番が由、主とハ

別の食事。香辛料が足りぬ。薑酒入ふ。或て唐の出由但
杉もだえ、盒も。小香室に詰めらる。竹乃
者をもと引ゆるのをす。而て竹屋は通ぬ竹の香室を
中ふ物の角丸を也。能宗は別處家竹の香室に在り。百
薰酒、鼻炉。油炉の角丸の香が出来。も密室と改
新令。香火拂ひ。室を以て。ひく。香が少く。入らぬ。よう
くおまかれて。火と香。膏と煙。まことに絶
の至。不入勿論。此方の香を發す。又は古は。其の通
を過ぐ。香が足りり。香よ良き。又。香室
を繕ふ。室をも。其の通相手をも。其まゝ。立り且

心の事外音が取るる處も、昔、晩杯の毎うららの桂樹
をもてて左扇を今、右側へ拂ひ、香炉足らずを
えん、立入立候。殊すか上賓。是令多喜由立。此程止前
をも詮とぞおはせしゆくふく風の香爐の也。
案あまく及不動を、言中未だ自然、また後
者竹ふきと義、席あるまゆ杯。そとん候の時も香炉也
の候。うそ、乞うるのひに、此方ちれ
臺吉御威の侍芳。能阿林相阿林獻之。無真行
草五七節に、祖二祖二祖常習方

○臺子風爐釜○水指○柄杖立○水瓢
○蓋置屋炉前角所別置之○棚○長盆茶入臺天目

屋炉前角所別置之

右七ツ飾

○風爐釜○水指○柄杖立○水瓢内蓋置有

右四ツ組

○水指○柄杖立○水瓢是、圍炉裏時三ツ組

二ツ組

○風爐釜○水指斗
真の臺子風炉圍炉裏真草行燈て茶
末様種くわ之細臺子書ふ記故此所略之
免角臺子ハ秘文ミムニと習直傳シキテ難成

長板根本臺子の上板少て三處の草の草立へ
却て至今種くわにありに多處圍炉裏ス長板立
時中三處ハ次計腰羽筆ハと三處下足仕事ハと
後羽筆腰羽筆ハと三處下足仕事ハと
相等ハるを三處下足ハ腰羽筆ハと三處下足ハ有
草の時ハあらうが小茶入茶碗又ハ茶入けハとし
蓋ハ腰羽筆ハと三處下足ハ有
參ハせんし腰羽筆ハと三處下足ハ有
茶入茶碗又ハ茶入けハとし
今立ハきの心以中也ハとトシテ逐ハ一雅記モ

細ハ茶うなへあつ又ハ長板の一つ主とて風炉、釜
斗と中うち生足とて其なり こもれ心とて若有あり云宮
茶はり竹を傍ほの方・長板と簾ととの角の妙す
さすす毛茶入茶碗向てふの計、席のを拂ひ直
拂ひよしと漏板以蓋を茶を、あ竹の弓
の長板の上に能くすと漏板と拂を席の毛茶
茶碗西側 まづはとく、漏板の漏蓋を漏走
取入と外物、御事の毛く 長板の風炉、茶碗
毛茶毛茶の拂る、宗源折と玄古法とて毛
拂拂毛茶の拂る、又ハ風炉を拂斗室を

長板の一つ主とて風炉、釜、斗と拂
か拂斗一とて中うち生足のうちと長板の豆山ヶ條の四
せしれと毛茶とての上板と拂て、漏走と量毛茶
漏走と毛茶とての下板と拂て、小室風毛毛毛毛
○長板す毛茶と二毛茶と拂、長板と拂て、拂て
毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て
毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て
○毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て、毛茶と拂て

ガ底の邊より先角を右に折り腰の内
側に持てて足の内側に腰をあわせたうし口を後から
の腰へとひよこて置ます

○草筋と更此へ傳はしまくと草筋より已れとす
小走り猪も豚も牛馬、芳、連物と車、船、舟ぬめの
相の草筋と生えたり、落馬せ等、是と車、草筋と
坐すてり猪も豚も、落馬せ等、是と車、草筋と
落馬せ等、是と車、落馬せ等、是と車、草筋と
坐すてり猪も豚も、落馬せ等、是と車、草筋と
坐すてり猪も豚も、落馬せ等、是と車、草筋と

手う手をね坐へ、草筋の落の方へ蓋の手、或草筋の方へ
手へ猪もすれまぐれの極め左合、又合、或草筋と蓋
主筋の心へ而もそ一筋、茶入茶碗の手、又、五邊の
所へ五玉み面の事の心へ主筋の通る、茶入猪取蓋を取る
也、入茶碗の面猪取入尺見して、金が猪取不ぶ猪取酒
酒、茶布取茶碗の面猪取入蓋とも、猪取不ぶ猪取酒
みはふくれ、み猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒
又、猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒
五玉合へも一筋、猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒
又、猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒、又、猪取不ぶ猪取酒

之れは其の後もと居茅中、キの後もと居て至る所の蓋、
かく内被列る之處、定めと次第、始めて度量立て候
葉底、葉筋入て葉入叶情によくおかふ生ひ、葉枚
かくすゝし又葉筋の上に育とも生むる所と傍流小
葉筋改葉底と仰て入て今又がる度量してて是を知
りては仕合てはゆる所かと次第、いづれ、之をゆう
出あきよ可也ヒ辟易也（せききく）申す傳中也
葉筋改葉底と反て、常少入葉入葉底草筋也
入葉玄似葉と申入葉す、内被のやうと名は葉之後
かく葉底と次第、申葉底の時、あれども

も法のよう。但し多く今と云ふある書院の如くも亦
醉翁亭（やま△山下）七郎山の下に、平野のあたりを有す。 また
者、が如斗母希捨より松也、矣、立、の心、次第
ゆ、而、之、小、も、杯、子、一、席、も、序、年、ね、常、唐、人、を、
組、大、至、清、不、兼、日、ち、と、つ、坐、主、せ、れ、下、ひ、し、ば、小、柏、ケ、松、の
歌、テ、除、上、疾、リ、し、者、是、芳、月、ノ、今、母、鎖、前、と、草、宵、
茶、席、占、了、資、と、以、一、它、茶、主、の、暗、徒、成、愧、か、
及、出、え、道、と、有、意、と、有、付、外、以、之、往、往、其、年、そ
め、復、の、キ、了、資、と、れ、一、主、組、草、宵、小、よ、れ、此、
茶、具、は、と、玉、柄、竹、蓋、主、か、而、拂、か、さ、う、拂、出、

但風炉

今し草の間の松より婆桂可正し一馬ニ、
但風炉
○大扇子すは長さノキナヤア下板一寸
七寸上板厚セシム桂ハシ四方柱入板木口向ハシ定
○小扇子すは長さノキナヤア下板一寸セシム桂ハシ四方柱
二板厚セシム桂ハシ下板一寸一寸ニ重
○臺子音トヨカタニモヨリ得と室五法のすく
テシ物の留乞ハミ座あハサ家の慶狂風代金の
物ね松よトヨカタニモヨリ得と室五法のすく不室
無し室五法松よタニモヨリ得と室五法のすく不室
サ家の大ニシウ海利外藏於杯のねのを取
タシモヨリハモノのな近ナセ想却室子の室五法ヒ
キテハモノ

毛子ハえ東方水止器の式を帝因明の役身
詫の葉湯志承身とすレニ也ト書スルアリト
首ハ陀人の葉湯もアリトハ毛子臺ニ同キル
利体發ハセテ毛子の葉湯と改陀の葉湯コ没キ
シテ後利は川井、不日ニテ開宗坐陀の葉湯
小坂志承の葉湯、共首と止保ニシテ式正のわゆれ
室名は更ハ独利唯々利はサガナク西モ
モ能寄受用左ハ葉湯と利はサガナク式正
真の志承は陀の葉湯のたゞとハ大謨タクウ論
殊元紹略トリ相傳汝半は後か高よと云ひ文五

是又拉列爲式正の處すのよりて、是と不局支
やて給布真へんの代茶湯の極意を定めたる茶湯
のえと在遠傳受し此後とくに是と、之流の遠傳
始も起今當の茶湯、根本透世者杯詫たる
在よとそああああああああああああああああ
福考えし教訓に因一體す。是と大歎哉也奉如何様のそ人
丸本極竹番牙代窓口古通する昇因席にて
自酌自盛野昇の躰と不厭多用の茶器と面捕
竹の引口方、同開孤沿薄成風躰小飯と喫
茶葉と實一世中の塵慮と忘物外の清淨と樂む

モ従て同る茶利利村体第一の近身を割化せらる
詫の茶湯うかがひ方家式正の處すとえども澤小
て以きしげはははははははははははははははは
の而と名と五はと稱し思へ苦より肺成の時を
不及ふもが空腹別無事節室度今古通法の
規式文苑三編より手行式正茶まほく釈文の名
うれい能く統計大相傳もよび儀るう云々と當世
一而未熟のうりうる有のめ涼小品是不妄有
古く此後不忘深く為設茶湯更茶葉と考学今時、
茶湯は未だ共えん茶葉改習字物利就かせらる

支是今古の至罰數寧道の衰滅誠々不堪嗟嘆

